

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

悲しみのミルク

2008年・ペルー映画
配給/東風
97分

2011(平成23)年5月22日鑑賞

第七藝術劇場

Data

監督・脚本：クラウディア・リョサ
出演：マガリ・ソリエル/スシ・サ
ンチェス/エフライン・ソリ
ス/マリノ・バリオン

👁️👁️ みどころ

「内向き」志向の強い日本では、南米ペルーは遠い国。1980年代、そこでは一体どんな凄惨なテロと集団レイプが？アンデスと聞けば美しいイメージだが、ヒロインが歌うアンデスの歌は実にもの悲しく心の奥底に響くもの。

「恐乳病」と「じゃがいも」を軸とした、平和ボケの国ニッポンではとても考えられない深くて根深い悲しみを、そのタイトルの重みとともにしっかり感じとりたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□こりゃ、絶対観なければ・・・■□

3. 11東日本大震災の発生後一時的に自粛していたアホバカバラエティー番組が、今またテレビを席卷している。また、次から次へとつくり出される邦画も、一部のしっかりした問題提起作を除いては、安易なテレビドラマの延長やヒット中の原作の焼き直しが多い。これでは日本人は与えられたものをただ習慣的に鑑賞するだけの「お茶の間観客」になってしまい、大量宣伝されている数種類の中から1種類を選ぶだけの積極性しか持たなくなってしまう。去る5月4日にJR大阪駅内に大阪ステーションシティシネマが開設したことによって梅田周辺におけるシネコン競争の激化は必至だが、そんな中、十三の第七藝術劇場や九条のシネ・ヌーヴォオそして梅田にあるテアトル梅田、シネ・リーブル梅田、梅田ガーデンシネマなどの特色ある「単館」がどんな作品を提供し、観客がそれをどう受け止めるかが今後ますます大きなテーマになってくる。そんな中、第七藝術劇場で上映されている『再生の朝に —ある裁判官の選択— (透析 Judge)』(09年)と『悲しみのミルク』は、去る5月16日にテアトル梅田で観た『歓待』(10年)に続いて、「絶対

観なくては！」と目をつけていた作品だ。

■□配給関係者に感謝！■□

『悲しみのミルク』は2010年の第59回ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞し、第82回アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされた作品だが、いくら優れた作品でも日本で配給・公開されなければ鑑賞することができない。本作は1976年に南米ペルーの首都リマで生まれた女性監督クラウディア・リョサの作品だが、商業主義（儲け主義）の配給会社が手をつけなかった本作の日本での公開にこぎつけたのは、川崎市アートセンターのディレクターたちの努力によるものらしい。その苦労話は本作のパンフレットに書かれているのでそれを読んでもらいたいが、そんな関係者たちに感謝！そして、その努力に拍手！

■□南米ペルーの今は？その80年代は？■□

南米ではBRICsの1つに数えられるブラジルがもっとも成功している国だが、ペルーは？現在ペルーは、左派の元軍人ウマラ氏とケイコ・フジモリ氏の争いを軸に、6月5日に投票される大統領選挙の真つ最中。内向き志向の強い日本ではペルーは遠い国だが、それでもケイコ氏の父親であるフジモリ元大統領の名前は知っている人が多い。

先日フィデル・カストロが引退を表明したキューバでは、カストロと共にチェ・ゲバラが有名だから、日本人もキューバには関心が高い。しかしパンフレットに書かれていたように、ペルーでも①1964年に毛沢東主義を奉じた「センデロ・ルミノソ」（輝く道）という革命集団が結成されたこと、②彼らはその残虐な手口から「南米のボル・ポト」と呼ばれるようになったこと、などを知っている人は一体どれくらい？彼らは1980年代に武装闘争を開始し、93年にフジモリ大統領の強権発動によって鎮王されるまで、その冷酷なテロ活動でペルーを徹底的な混乱と恐怖に陥れたらしい。また劇中に語られる集団レイプもその戦略のひとつだった、とのことだ。

■□「恐乳病」と「じゃがいも」からどんな「悲しみ」を？■□

日本人が戦後66年間を平和に暮らせたのは幸せだが、逆にそれが「平和ボケ」を生み日本人の思考力を低下させていることは明らかだ。したがって、そんな日本人には本作冒頭に描かれた母親の悲しみやファウスタの悲しみは容易に理解できないはず。しかし、本作を観れば、せめてそれを感じとることはできるのでは？

狂牛病や狂犬病は知っているも、「恐乳病」という言葉は誰も知らないだろう。学術的にそんな言葉があるのかどうかは知らないが、パンフレットによると、それは「母親が体験した苦しみが母乳を通して子供に伝わるという病」らしい。ファウスタも叔父家族も彼女が恐乳病だと信じて疑わないから、彼女がすぐに鼻血を出して倒れるのも、独りでは出歩

けないのもこの病気のせいと思い込んでいる。さあ、本作が提起するそんなファウスタの「悲しみ」をあなたはどう感じとる？

この恐乳病が本作のストーリーの軸の1つだが、もう1つが「じゃがいも」。あの食べるじゃがいもだが、実はファウスタは「下劣な男」から身を守るために、自分の身体の奥にじゃがいもをうずめているらしい。「そんなバカな！」と普通の日本人なら一笑に付すところだが、どうもそれはホントみたい……。しかして、生きているじゃがいもは発芽するから、その芽は時々ファウスタの両足の間から……。静かに切り替わっていく数々のシーンの中で、時々示されるそんなシーンを観ると、そこから感じとるあなたの「悲しみ」とは？



(c) Courtesy of Wanda Vision

■□「涙の歌」からいかなる「悲しみ」を？■□

本作は冒頭、衰弱した1人の女性がベッドの中でいかにも悲しげな歌を歌っているシーンから始まる。この歌は、ペルーに暴力が吹き荒れた時代、彼女が受けた壮絶な仕打ちを物語る「涙の歌」らしいから、まずはその歌詞に注目！そしてまた、アンデスの女たちに歌い継がれているというその独特の節回し(?)にも注目！この歌はアンデス系の先住民である「ケチュア」が使うケチュア語で歌われているらしいが、肌の白いスペイン系住民との対立(による圧制?)も含めて、その「悲しみ」を感じとることができる。

今死の病床でこの歌を歌っている女性こそ、あの時代のテロと集団レイプの犠牲者であり、その傍らでやさしく手を握り見守っている美しい女性こそが、チラシで見た赤い花を

口に含んだ姿が印象的な本作のヒロイン、ファウスタ（マガリ・ソリエル）だ。本作中盤には、ファウスタがメイドとして働くことになった女性ピアニスト、アイダ（スシ・サンチェス）に対して「人魚の歌」を歌って聴かせるシーンが登場するが、これもファウスタの心の悲しみをそのまま即興的に歌ったアンデスの女たちの音楽らしい。スランプ期にあった（？）ピアニストがその曲を気に入って、それを譜面に写しとり演奏会で発表する様子は興味深い。本作ではこの「涙の歌」からもファウスタたちの「悲しみ」を感じとりたい。

■映画ファンも、「内向き」からの脱却を！■

本作にはファウスタの従姉妹の結婚式やそのパーティーの様子が登場し、南米特有の派手な音楽や踊りが披露されるから、必ずしも静かでもの悲しいシーンばかりではない。また、極端な男性不信感を持つファウスタにとって大きな存在となった庭師のノエ（エフライン・ソリス）が、さまざまなシーンで暗示的な行動を見せる。さらにラストに向かっては、ピアニストから「人魚の歌」を提供するたびに1粒ずつもっていた真珠を握りしめたファウスタのある決意について、ノエが重要な役割を果たすことになる。

テレビドラマの延長のような邦画ならその様子をいくらでも説明できるのだが、ペルーのアヤクーチョのまち（ケチュア語で「死者の一隅」という意味）で展開される本作のストーリーや問題点は、とても私の文章力では表現できるものではない。つまり、観客が直接観て聞いて、感じ取ることが不可欠なのだ。そこで問題になるのが、今の日本人とりわけ若者たちの内向き志向。「午前十時の映画祭」が予想以上に人気を集めたのは、往年の名作に慣れ親しんでいる年配の映画ファンの需要によるものだ。せっかく川崎市アートセンターが本作のような価値ある1作を日本で公開・上映しても、肝心の映画ファンが「内向き」なら映画館まで足を運ぶことはありえない。日本の企業も優秀な人材を日本からではなくアジアとりわけ中国から集めようとしている現状にあって、若者に求められるのは内向き志向からの脱却だが、映画ファンも是非「内向き」からの脱却を！

2011（平成23）年5月25日記